

## 「子どもの発達の意欲値及び自分の伸びしろ値理論」

子どもたちがテニス運動以外にもやる気、頑張る気持ち、前向きになる気持ちなどが、昨日より今日、今日より明日に向かって継続して強くなるのである。昨日より今日、今日より明日に向かって継続して、この子どもたちの内なる向上する気持ちは何だろうか。理解したいという思いが強く湧いた。楽しく心地よいテニス運動を通して、子どもたちの気持ちまで継続して生き生きと輝かせているのはいったい何であろうかということである。

研究の結果、小生の指導法である「プレーヤー自身の身体運動に基づくテニス打法」により、子どもたちが自身の考えで身体を動かしボールを打つという人間工学的打法が効果を得たものであることがわかった。

この方法が、昨日できなかったことを今日積極的に自分で取り組んでいる様子や今日より明日に向かって前向きになっていく姿勢は、自分自身で何かできそうな気がするという気持ちを持ち続けているということである。つまり、今できることだけではなく、第三者からの支援を受けなくても自分でできるという、シグナルやサインを出しているのである。これにより、この気持ちを持ち続けることから結果的に自分自身でできるようになるのである。そして、自分でできたときの喜び、笑顔そして自信につながる意欲をみたのである。

この考え方は、「子どもの発達の意欲値及び自分の伸びしろ値」であると考えたからである。子どもの発達の意欲値及び自分の伸びしろ値は、子ども自身が自分で何かできそうな気がする気持ちを持ち続けることなど自分で考え行動し、結果的に自分自身でできた値の発達であると考えるのである。昨日より今日、今日より明日に向かって、自分自身でできるようになることも発達であると考えるのである。

すなわち、自分で自分を評価できたということである。この能力は、「客観的な自己」「もう一人の自分」などと形容されるように、現在進行中の自分の思考や行動そのものを対象化して認識することにより、自分自身の認知行動を把握することができる能力、つまり「メタ認知能力」を育んだのである。

こう考えることは、幼児から10歳位までの子どもや障がい児の発達の支援には最も適している必要であるのではあるまいか。子どもは行動しながら発達していく。障がい児は行動の障害と発達の障害という二重の意味をもっている。行動とは自分自身の思ったとおり、考えたとおり、身体を動かすことである。この行動を意欲的にするためには、自分自身で何かできそうな気がするという気持ちを持ち続けることである。すなわち、発達の意欲や自分の伸びしろを継続し持ち続けることが、子どもの発達につながるのである。